2016年10月号
特集

よみがえる
思い出

ふくしま古民家巡り

郷愁誘う旧家・古民家は心の原風景

長い年月を経て、もはや風景の一部として愛され続ける旧家・古民家は、私たちの心の原風景と言っても過言ではないでしょう。〝用と美〟を兼ね備え、独特の個性を放ちながら地元の歴史や文化の記憶をとどめ伝える古い建築物は、先人たちの暮らしの知恵の宝庫です。長年にわたり重要文化財復原工事や旧家・古民家の再生工事を手掛けてきた大工職人・三浦藤夫さんを訪ね福島市内に残る旧家・古民家の魅力、保存の重要性などを伺いました。

三浦 藤夫さん

昭和21年福島市生まれ
三浦工匠店（有）代表取締役
ふくしまの旧家を活かす会 副会長
福島ヘリテージ マネージャー

槍鉋で材木の表面を仕上げる三浦さん

家づくりの究極は数寄屋造り

16歳で大工の棟梁に弟子入りし、20代で独立した三浦藤夫さんは、大工歴50年の大ベテランです。一般住宅に加えて、旧家や古民家の修復なども手掛けるようになったいきさつを伺うと「良い建物を追及していくと数寄屋建築にたどりつきます。30代の頃、もっと高みを目指そうと全国から広く受講生を募った〝日本建築セミナー〟に通うようになったことがきっかけです」と話してくださいました。講師陣は、日本建築界のトップクラスが勢ぞろい。文化庁が管理する文化財の解体修理を目の前で勉強することができたそうです。「約16年間通って本物を見ながら学んだことは私の財産です」

三浦藤夫さん所有の古い大工道具
左から鋸（のこぎり）2種類（縦引き・横引き）、大鉞（おおまさかり）、前釿（まえちょうな）2本、槍鉋（やりがんな）2本

- 縦引き、横引き、大鉞は、明治時代の道具。
- 大鉞は、大きな梁の皮をはぐ時に使う。
- 釿は、木材を名栗（なぐり）※2の時に使う。
- 槍鉋は、平安時代の道具。前釿で荒削りした後の仕上げで使う。

建築技術は仕事がないと残せない

さまざまな登録文化財の復原・再生工事を手掛けてきた三浦さん。解体復原工事には、伝統工法のエキスが詰まっていると言います。「継ぎ手や仕口※1など、確かな技術を持った職人の見事な仕事には毎回感動させられます。使われている木材も適材適所があって山の峰に育つ松は粘りがあるから梁に、沢に育つ栗は湿気に強いから土台に、その中間に育つ杉は柱に使うなど、実にうまくできています」

旧堀切邸にある十間蔵の解体修復もそうしたエキスにあふれていたそうです。「約270年前の土蔵の一階部分を解体して復原しました。柱の悪いところは根継ぎをし、全長14メートルの中梁を取り換え、土壁は全部塗り直しました。苦労もありましたが全てが勉強でした。原型が残っていて、腕のいい職人がいたからこそできた工事でした」

三浦さんに専門家の立場から市内に残る旧家・古民家について、建物の特徴や見どころをお聞きしました。時を超え現存する歴史的建造物を通し、残すべき素晴らしい先人の知恵や技をぜひご覧ください。

職人の技をご覧ください

※1 仕口（しくち）…大工の技の一つ。部材を直角または、ある角度でつなぐ加工方法の総称
※2 名栗（なぐり）…釿などで独特の削り痕を残す日本古来からの加工技術

1775（安永4）年に建立された蔵で、桁行（長さ）が十間（約18メートル）ある

福島市指定有形文化財

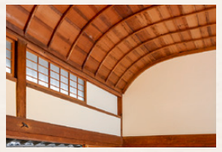
旧堀切邸 十間蔵

手仕事の魅力を余すところなく伝える母屋と十間蔵

旧堀切邸は、江戸時代から続いた豪農・豪商の旧家です。明治14年に再建された母屋の屋根は、東京駅と同じ雄勝産のスレート瓦葺。組子欄間、ツルやカメの形をした釘隠し※3、奥の間の書院造り、次の間の地形に合わせたアールの天井など、見どころがたくさん。敷地内には、江戸時代後期に建てられた県内最古の十間蔵も残っています。主に米蔵、時代によっては酒蔵などにも使われていたようです。中でも、全長14メートルもある中梁は必見です。伝統工法の特徴でもある礎石の上に柱を立てる〝石場建て〟や、竹木舞を組み、藁スサを混ぜて寝かせた粘土を幾重にも塗り重ねた厚さ25センチの土壁も、熟練の技で造り上げた仕事の魅力を余すところなく伝えています。

母屋（手前左）と十間蔵（右奥）

福島市飯坂町字東滝／町16　☎024-542-8188
開館時間／午前9時～午後9時
見学料／無料　休館日／無休（臨時休館あり）



母屋のアール（曲面）の天井

ケヤキの彫刻欄間がある書院

前釿で仕上げた全長14メートルの中梁

※3 釘隠し…長押（なげし）などに打った釘の頭を隠すために用いる建築装飾金具の一つ